世界聖餐日礼拝説教 「神の御業がこの器で」

日本基督教団石神井教会　2018年10月7日

【使徒書日課】使徒言行録　5章27～42節

27彼らが使徒たちを引いて来て最高法院の中に立たせると、大祭司が尋問した。28「あ
の名によって教えてはならないと、厳しく命じておいたではないか。それなのに、お前た
ちはエルサレム中に自分の教えを広め、あの男の血を流した責任を我々に負わせようとし
ている。」29ペトロとほかの使徒たちは答えた。「人間に従うよりも、神に従わなくては
なりません。30わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活さ
せられました。31神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手
とし、救い主として、御自分の右に上げられました。32わたしたちはこの事実の証人であ
り、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証ししておられま
す。」
33これを聞いた者たちは激しく怒り、使徒たちを殺そうと考えた。34ところが、民衆全
体から尊敬されている律法の教師で、ファリサイ派に属するガマリエルという人が、議場
に立って、使徒たちをしばらく外に出すように命じ、35それから、議員たちにこう言った。
「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いは慎重にしなさい。36以前にもテウダが、
自分を何か偉い者のように言って立ち上がり、その数四百人くらいの男が彼に従ったこと
があった。彼は殺され、従っていた者は皆散らされて、跡形もなくなった。37その後、住
民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こしたが、彼も滅び、
つき従った者も皆、ちりぢりにさせられた。38そこで今、申し上げたい。あの者たちから
手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅す
るだろうし、39神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、
諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」一同はこの意見に従い、40使徒たちを呼
び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話してはならないと命じたうえ、釈放した。41そ
れで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法
院から出て行き、42毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音
を告げ知らせていた。

【福音書日課】マルコによる福音書　14章53～65節

53人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、
集まって来た。54ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、下
役たちと一緒に座って、火にあたっていた。55祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にす
るためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。56多くの者がイエスに不
利な偽証をしたが、その証言は食い違っていたからである。57すると、数人の者が立ち上
がって、イエスに不利な偽証をした。58「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神
殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたし
たちは聞きました。」59しかし、この場合も、彼らの証言は食い違った。60そこで、大祭
司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか、この者たち
がお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」61しかし、イエスは黙り続け何もお答
えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなの
か」と言った。62イエスは言われた。「そうです。
あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る。」
63大祭司は、衣を引き裂きながら言った。「これでもまだ証人が必要だろうか。64諸君は
冒涜の言葉を聞いた。どう考えるか。」一同は、死刑にすべきだと決議した。65それから、
ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、「言い当ててみろ」と
言い始めた。また、下役たちは、イエスを平手で打った。

使徒たちが続けたことを…

今年も 10 月第一日曜日を「世界聖餐日」として憶え、礼拝に集ってきました。何のことはない、わたしたちが毎月一度は主日礼拝の中で祝っている聖餐に今日もあずかるのです。まだ教会と世界が深い分裂のただ中にいた 80 余年前、キリスト者の先達が願ったのは、「聖餐による教会・キリスト者の一致」でした。その願いを、残念ながらわたしたちもまだ続けなければならないゆえに、わたしたちは、今年も、「世界聖餐日」を憶えて礼拝に臨むことになりました。

わたしたちが「聖餐によって一つになる」ことを願うのは、決して排他的な考えからではありません。聖餐を共に祝うキリスト者だけを仲間として、他の者の加わりにくい、その代わりに強固な集団を造ろう、というのではないのです。わたしたちが願っているのは、むしろ逆のことです。ただ「聖餐」によって指し示されるところだけに拠って立つことによって、わたしたちは、どんな人も排除しない、あらゆる人を互いに受け入れ合う、その意味ではこの世の現実ではまったく不可能なような交わりを始めることができると信じているのです。洗礼を受けたキリスト者だけがパンと杯にあずかる聖餐の営みが、逆説的に、わたしたちすべての者の間にある隔ての壁を取り除く道を行かせる原動力になっているのです。

その営みを、わたしたちは、最初の時代の使徒たちの教会から受け継いできました。使徒言行録には、繰り返し、初代教会が「パンを裂くこと」と呼ぶ儀式をしていたことが伝えられていますし（使徒 2:42 など)、わたしたちが聖餐の式の中で告げる「聖餐制定の御言葉」は使徒パウロが伝えるものです（Ⅰコリント 11:23 以下)。使徒たちは、それを、主イエスがお始めくださったこととして続け、後に続く者に受け継がせました。使徒ら弟子たちは、かつて主イエスが行かれた宣教の旅に従ったのでしたが、主の復活後、聖霊を受けてからは、主が為されたすべてのことに従って行く道を歩んだのです。

今日の使徒書日課・使徒言行録は、初代教会の使徒たちが、ひたすら主イエスの為されたことに倣い、従って行こうとする者たちであったことを、わたしたちに伝えてくれています。福音書日課・マルコ福音書に描かれているように、使徒ペトロは、主イエスが捕らえられて大祭司のところに連れて行かれたとき、距離を取りながらもそっと従って行こうとしていたのです。ペトロは、主イエスの一番弟子を自認していましたから、たとえ主が死ぬような目に遭われるとしても、自分は従って行くのだと、公言していたのです。大祭司のもとにユダヤの最高法院のメンバーが集まって裁判が始まったときにも、ペトロは、その様子を隠れて覗っていたのです。そこでは、ユダヤ社会の権力者たちが、主イエスを死刑にしようと責め立てていました。それに対して何もお答えにならずにお黙りになったままの主イエスのお姿を、ペトロも見ていたのでしょう。大祭司の最後の一声で、死刑の決定が下されるや、主イエスが侮辱される様子も、見ていたのです。ただ、ペトロは、その直後、その場を離れ去ってしまいました（66 節以下)。「あなたも、あのイエスと一緒にいた」と問われたのがきっかけでした。

主イエスの名によって…

ペトロだけではありません。主イエスの宣教の旅に従って来ていた弟子たちは皆、主イエス逮捕の後、主イエスのもとから離れ去ってしまったのです。主イエスを裏切った（＝人の手に引き渡した）のは、イスカリオテのユダだけではなかったのです。

そのペトロら弟子たちが、再び主イエスに従う道を歩み始めたのは、復活の主イエスとお会いする経験をしてからでした。すでに復活の主イエスと出会っていた女の弟子たちの証言を聞き、また復活の主と食事を共にしたという弟子たちの証言も聞き、ペトロたちは、自分も再び主イエスにお会いしたいと願いながら、一つに集まっていたのでしょう。そこに、主イエスが現れてくださったのです。

ペトロたちの教会が、復活の主イエスと共に歩んだのは、イースターから 40 日の間だけだったと、使徒言行録は描いています。けれども、その後に聖霊が降るとペトロたちの教会は、それまでにも増して、主イエスに従い、主イエスと共に歩むという自覚を確かなものとするようになった、と言ってよいと思います。それが、この使徒言行録で力強く描かれている彼らの教会の姿なのです。

彼らは、主イエスの名によって教えました。主イエスの名によって、人々の病気を癒しました。何をするにしても、主イエスの名を身に帯びて、彼らは行動したのです。それは、かつて主イエスが為されたように、最高法院に引き出され、大祭司の前で尋問をされ、証言を求められたときも、同じでした。主イエスと同じように鞭打たれて辱めを受けても、それさえも「**イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜**」んだのです。

これが、福音書に描かれていたのと同じペトロら弟子たちの姿かと思います。けれども、使徒言行録は、まさにこの弟子たちの姿を描き伝えないではいられなかったのでしょう。この姿こそ、復活の主イエスとお会いした後に弟子たちの姿。いいえ、この姿こそ、復活の主イエスと結ばれる洗礼を受けたわたしたちの、あるべき姿、あり得べき姿。そう、使徒言行録は語ってくれているようです。

この弟子たちの姿の変化は、どうしてあり得たのか。わたしたちの信仰者としての姿は、どのようにして、この弟子たちのように変化しうるのか。そのヒントは、やはり、福音書の物語の中にあるようです。

主イエスが大祭司の屋敷へと連れて行かれたとき、隠れて従って行こうとしたペトロの心中は、どのようなものだったのか。福音書の物語を遡ってみれば、すぐ直前、ゲッセマネの祈りの前の場面で、主イエスが弟子たちのつまずき、離反を予告し、それに対してペトロらが、「**たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません**」（マルコ 14:31）と言い張ったと描かれています。さらに遡ると、すぐ直前の「過越の食事」の場面でも、主イエスが弟子の裏切りをお語りになられていることが分かります。そして、その弟子たちの裏切りや離反が告げられる最中になされたことこそ、主の晩餐の出来事であったと、福音書は描いているのです。主の晩餐は、主が裏切り者や離反者をお招きくださった出来事であった、というのです。

人間ではなく、神に…

ペトロらの教会が「パン裂き」と呼ばれる「主の晩餐」を記念する聖餐の営みを最初から始めていたのは、彼らの主イエスに従い続ける者としての原点、原動力をそこに見ていたからに違いありません。自分たちが主を裏切らんとしていたとき、主から離れ去ろうとしていたまさにそのとき、主イエスは、自分たちをご自分の食卓に招いてくださっていた。ご自分の命をも与える覚悟で、移ろいやすい弟子たちを忍耐して待ち続け、弟子たちと共にいる決意を、お示しくださっていた。主の十字架死の後、弟子たちは、そのことの意味が分かるようになっていったのでしょう。食卓の交わりを続ける中で、主イエスは、パンを差し出され、杯を回されながら、ご自身を弟子たちに差し出され、弟子たちとまったく共にいてくださる決意をお示しくださっていたのだ、と。

自分を裏切る者と共に居続ける。自分から離れ去ろうとする者に、なお自分を与え続ける。それは、わたしたちの目には愚かな態度に映ります。信頼に値しない者をなお信頼し続けることが、できるでしょうか。親が子に対することであれば、ある程度は可能かもしれません。しかし、わたし自身三人の子の親として歩んできてみて、それほど容易なこととは到底思えなくなりました。あの放蕩息子のたとえ（ルカ 15 章）の父親のように寛容な態度を、どの親が取ることができるだろうかと思います。ひとたび信頼に値しないとレッテルを貼ってしまったら最後、わたしたちは、その相手を再び信頼することは、難しいのです。せめて、どこかに信頼の一かけらでも残っていないかと、一縷の望みをかけるのが、わたしたちの為しうる最後の砦なのではないでしょうか。

主イエスは、その最後の砦さえ失われた後になお、弟子たちを信頼し続けるという決意を、お示しくださったのです。ご自分の「体」を与える、「血」を与える、というのは、そういう決意の表れだと言ってもよいのです。信頼に値しない者を、なお信頼し続ける。この、わたしたちには不可能な他者に対する態度を、主イエスは、主の晩餐の営みを通して、弟子たちにお示しになられたのです。

それは、しかし、まさに神だけが可能なことなのだと、主イエスもお考えだったのかもしれません。ゲッセマネの祈りでの主イエスの苦悩を思い起こすとき、そう思えます。人にはできないのです。しかし、神にはできる。人には期待できないのです。しかし、神には期待できる。そう、ただ神だけが、信頼に値しない者、すべての人間に対して、なおご自身をお与えくださり、共にいるとおっしゃってくださり、なお信頼を示し続けてくださる。その神を御父として従われた主イエスは、神の子として、いかにその道に従い続けるかを、問われ、いかにして弟子たちをその道に続かせるかを、お考えになられたのではないでしょうか。そして、あの主の晩餐の営みに示される一連の出来事を、弟子たちと共に歩まれた。

主に従う道に留まらせていただいているわたしたちは、それだからこそ、主の晩餐にあずかるたびに、人ではなく神に期待し、人にではなく神に従うことを思い起こすのです。信頼に値しない者をなお信頼し、その者と共にいる。その道が可能になるのは、わたしたちが、神に期待し、神に従う者であるときなのです。